東京都足立都税事務所長賞

「使われなかった教科書」

足立区立　江北桜中学校

三年　吉澤　志歩

「そろそろ学校が始まるんだから、部屋を片づけなさい。」夏休みの終わり、母に言われて机の周りを片づけていた私は、部屋の隅に積まれた教科書に目を留めた。新品同様で名前だけが書かれたまま、一度も開かれていないものもある。「もったいない。」少し胸が痛んだが、そのときの私は仕方がなかったと自分に言い聞かせるだけだった。

それらは、二度の転校を経て私の部屋に残された教科書だった。思いがけない出来事から私立を離れ、転校先でも人間関係になじめず私は一時期、学校へ通えなくなってしまったのだ。自分だけが社会から切り離されたような暗い日々の中で、あの教科書は静かに埃をかぶっていた。その後、友人のいる今の学校へ移り、ようやく毎日楽しく通学できるようになった。

私はその教科書を見ながら、母に尋ねた。「もう使わないから捨ててていいでしょ？」私立中学では学費やタブレット代などを両親が負担してくれていたため、この教科書も親が買ったものだと思い込んでいた。すると母は静かに言った。「その教科書は、私たちが買ったものじゃないの。税金で配られているものなのよ。」私は言葉を失った。私立と公立のどちらも経験したからこそ、母の言葉が強く心に残った。公立中学では、教科書は税金によって支えられていたのだ。

私たちが当たり前のように受け取っている教科書無償措置制度は、昭和三十八年から続いてきたものだと知った。毎年何気なく受け取っていた教科書の背景には、長い年月をかけて続いてきた制度と、納税してきた多くの人々の存在があった。学校へ行けず、一人ぼっちだと思っていたあのときも、私は決して一人ではなかった。税金という形で、見知らぬ人々の「無言の応援」に温かく包まれていたのだ。

使われなかった教科書を見つめると、その大切な支えを生かせなかったことが申し訳なく思えた。不登校は自分が望んだ結果ではない。それでもあの教科書との出会いは、私の税金に対する見方を大きく変えた。

来月、私は修学旅行で京都と奈良へ行く。事前学習のために歴史の教科書を開こうとしたとき、真っ先に手が伸びたのは使われないまま部屋に残っていたあの教科書だった。「この教科書をこのまま終わらせたくない」と強く思ったのだ。私は今、税金に支えられながら勉強している。いつか自立して社会の一員になるための長い助走期間をもらっているからだ。

部屋の隅で埃をかぶっていたあの教科書は私が一人ではなかったのだと教えてくれた。いつか社会に出たら、私も納税という「無言の応援」に参加したい。そう深く心に思いながら私は京都と奈良で学ぶためにあの日まで一度も開かなかった教科書をもう一度開く。もう「捨てていい」とは決して思わない。